

雪舟フォーラム

テーマ

『画聖 雪舟の魅力を探る！』

パネリスト 守安 收 もりやす おさむ

昭和26年岡山県総社市生まれ。岡山大学法文学部哲学科（美学美術史専攻）卒業。同大学院文学研究科美術史専攻修了。岡山県立井原高等学校教諭、岡山県立博物館学芸員を経て、現在、岡山県立美術館主任学芸員として『岡山の絵画』をテーマに研究活動を行っている。（兼職...岡山県立大学非常勤講師）

パネリスト 高橋 範子 たかはし のりこ

昭和32年大阪市生まれ。帝塚山学院大学美学美術史学科卒業。現在、財団法人正木美術館学芸員として、日本の中世水墨画、墨蹟の作品群を中心に、禅宗文化の研究に従事。帝塚山学院大学などで講師として講義を担当している。

パネリスト 福島 恒徳 ふくしま つねのり

昭和37年熊本県生まれ。九州大学大学院文学研究科哲学哲学史専攻修士課程修了（美学美術史学科）。現在、山口県立美術館研究員として勤務（中近世日本絵画史専攻）。『大内文化の遺宝』展開催及び図録執筆などをはじめ、雪舟の山口における活動背景について研究を行っている。

パネリスト 對本 宗訓 つしもと そうくん

昭和29年愛媛県八幡浜市生まれ。京都大学文学部哲学科卒業。昭和53年天竜寺僧堂に入り、平田精耕老師に付いて修業し印可を受けた。平成5年臨済宗佛通寺派の管長に就任。

パネリスト 大島 千鶴 おおしま ちづる

昭和37年岡山県井原市生まれ。日本女子大学文学部史学科卒業。現在、芳井町立歴史民俗資料館学芸員として郷土に根差した特別展を企画。また、地元有志らと雪舟を語る会を主宰し、雪舟を核とした様々な文化活動に取り組んでいる。

司会

大変お待たせいたしました。

それでは、「画聖雪舟の魅力を探る」をテーマに「雪舟フォーラム」を行います。

開催に先立ちまして、トークセッションを繰り広げていただきます、コーディネーター並びにパネリストの皆さんをご紹介します。

まず、コーディネーターには、先ほど基調講演をいただきました島尾先生にお願いいたします。パネリストには、岡山県立美術館主任学芸員守安収先生、大阪府にあります西日本最大の水墨画コレクションを有する正木美術館学芸員高橋範子先生、山口県立美術館研究員福島恒徳先生、雪舟さんとは非常にゆかりのある臨済宗佛通寺派管長對本宗訓様、地元芳井町立歴史民俗資料館大島千鶴学芸員、以上の6名の先生方にお願いいたします。

それでは、島尾先生、よろしくをお願いいたします。(拍手)

東京国立文化財研究所主任研究官・島尾 新

それでは、かなり時間が押してきておりますので、主催者の方から「最悪4時半には終わる」と言われておりますので、1時間ばかりしかございませんが、先ほど私、割かしきたい話をしましたので、こちらは少しやわらかくいきたいと思っておりますけれども。

それで、先ほど申し上げましたように、私の方の話しかしませんでしたので、今度はちょっと雪舟の人生と、それからその雪舟のなぞといいますが、その魅力を含めて、ちょっとざあっと生まれてから亡くなるまでというのを、まず守安さん、それから高橋さん、それから福島さんに、それぞれ7分ぐらいずつで順番に簡単にまとめていただきまして、それからまたいろいろお話を伺っていくということにしたいと。

じゃ、すみませんが、守安さん、お願いします。

岡山県立美術館主任学芸員・守安 収

守安です。私は第1回の雪舟サミットでも参加させていただきまして、その一巡目といいますが、再度、芳井にお招きいただき、大変光栄に思っております。

私は、雪舟さんと同じ誕生地といいますが、私の誕生地というほどのもんじゃありませんが、総社の出身でございまして、同じ小学校に行ってたはずであります。ともあれ、それは後にしまして、とりあえず私は、生まれてから中国から帰ってきます50才ぐらいまでの話をかいつまんでやってみたいと思います。

雪舟といえます方は、先ほどの島尾さんの話にもありましたように、もうなぞがたくさんあると、まさに邪馬台国を探すようなもんだと。結局、死んだところもそうですけれども、もう若いときに何をしていたんだというような、どんな絵をかいていたんだと、そういったところも随分わかんないところがたくさんあります。ですから、みんなが参加できるなぞ解きといいますが、美術史上の最大の人の一人であるというふうに思っております。ともあれ、この私の担当分、前半生は特になぞが多いと。したがって、今お話しするのは、現時点で、言ってみれば考えられる雪舟像であるということをお断りしておきたいというふうに思います。

雪舟が生まれましてのは、西暦の1420年、今の総社市の赤浜というところであります。ちょうど、その1420年という年は、大飢饉があった年ということではありますが、オギャーと生まれましてすくすくと育ったんだろうというふうに思います。赤浜の誕生碑

というのは、山陽自動車道の総社インターチェンジのすぐ南手にあります。ですから、皆さん方も高速道路のついでに、ちょっとおりられたら、その碑に会えるということだろうと思います。

雪舟さんの姓といいますが、今でいう名字でございますが、「小田」というふうによく言われております。小田といいますのは、もちろんこの芳井町を流れております小田川、清流小田川の小田であります。小田氏といいますのは、この備中の名族で、いわゆるお城を持っているような豪族、そしてまた教養人もたくさん出ておりますので、雪舟のような大画家が小田氏から出たとしても不思議じゃないと。しかし、確認するまでには至っていないと。少なくとも、同時代の資料では藤原氏の末流であると。恐らく、その赤浜の地主さんで、農業なんかを営んでいる家に生まれたんだらうというふうに思います。

そして、もう皆さんエピソードで、涙でネズミの絵をかいたというエピソードで有名な宝福寺に入ったということになっておっておるわけです。ただ、この宝福寺で修行を本当に始めたのかということになると、最近じゃ、いろいろと異論も出ております。それはなぜかと申しますと、京都の相国寺というお寺へ雪舟が入ったことは、一応認められておると。その相国寺では、春林周藤というお坊さんに師事したわけではありますが、そのお坊さんに直接師事したとしたら、雪舟が11歳のころ、あるいは28歳のころということになってしまうわけです。そういうふうに考えますと、28歳で修行に入って大画家になるかということ、ちょっとこれは無理だろうと。そうすると、宝福寺を省略して、直接相国寺へ入ったんじゃないかという説もあります。

しかしながら、私、別に総社の人間だから言うんじゃないかもしれませんが、ちょうど雪舟より1つ年下の同じく禅僧が、やはり9歳で岡山の備前のお寺に入って、13歳で京都の東福寺へ行っていると、そういう例もありますので、別段宝福寺に入って、ネズミのエピソードは別として、相国寺へ赴いたというふうになっても不思議はないだろうというふうに考えております。

その相国寺では、当時最大といいますか、最高のも水墨画周文という人がおりました。ですから、雪舟はその周文の門下生として絵の才能を伸ばしたんだらうというふうに考えていいと思うんです。

しかし、禅寺の中では、職分といいますのは、お寺への来賓の接待役、案内役という知客という役職でございまして、これは余り重要なといいますか、重い役じゃなかったわけでありまして、ですから、雪舟というのは出世の道は、言ってみればあきらめていたという部分があったと思います。

そして、雪舟はどうも30代の半ば過ぎに、山口の方へ赴くわけでありまして。この京都を離れた理由といいますのも、いろいろ考えてみなければならぬと思いますが、基本的にはその禅僧としての立身出世をあきらめる、あるいは成功をあきらめると言った方がいいかもしれませんが、そういうこと。そして、言ってみれば、その周文という水墨画家です。先ほど島尾先生のスライドの中にもありましたように、日本の水墨画の、言ってみ

れば骨格の弱さといいますが、そういったものをやっぱり飽き足りない部分というのがあったのかもしれませんが。その周文の呪縛といいますが、先生の、言ってみれば・・・ところから出て行って、

新しい世界を築こうという意欲があったのかもしれない。ともあれ、30代の半ばに、京都を出て山口へ行くと。そして、姿をきちんと我々の前に資料的に出してくるのは45歳。これは山口における雪舟のところ

へ友人が訪ねてきて、書いとる文章があります。それによりますと、山口にいる雪舟・・・雪舟という言葉ま

で言っています、ちょっとこれは後で言う・・・には、大変有名な人がいると、それはその名前を、もう大人

も子どももみんな知ってるぞというふうに書いてあります。ですから、45歳の彼は、かなり有名な画家であったと言っていいと思うんです。

しかし、ここで一番大きななぞというのが出てまいります。それはなぜかと申しますと、雪舟が、今まで私「雪舟」「雪舟」と言ってきましたけれども、どうもこの45歳ぐらいまでは雪舟(ゆきふね)の雪舟(せっしゅう)と名乗っていなかったようなんです。ですから、今我々が幾ら探し回っても、その雪舟(ゆきふね)と書いた若い時代の作品というのは出てこないわけなんです。恐らく別の名前で、言ってみれば制作活動をやっていたんだろうと、そしてそれはどういう名前だろうというのが、ここ何十年か、大変話題になっておりましたが、最近に至りまして、大体拙宗(せつじゅう)と言いますが、あるいは拙宗(せっしゅう)とも読んでいいかと思うんですが、「拙(つたな)い」という字がありますが、てへんに「出る」という字、それに宗教の宗(しゅう)これも同じく拙宗(せっしゅう)と読めるわけでありまして。その拙宗等楊(せつしゅうとうよう)と、その諱(いみな)の結局、名前の方は一緒であります。そういうことになりましたと、前半生といいますが、拙宗(せっしゅう)あるいは拙宗等楊(せつじゅうとうよう)と名乗りまして、それが雪舟(ゆきふね)という名前を変えまして、言ってみれば中国へ飛び出していくというふうに考えていいんだらうと。そして、その雪舟(ゆきふね)と正式に号するようになったのは、どうも48歳で、中国へ渡る直前であったようであります。

中国、当時は、先ほどもお話にあったように明の国であります。明の寧波というところへ着きます。ちょうど船は、12隻の船団で出ていったようであります。寧波で、その船待ちが、北京へ入る間に天童山景德禅寺とかというような大変中国の有名な大きなお寺、禅寺を訪ねまして、そこで四明天童第一座というような高い称号をいただきまして、それを雪舟は生涯誇らしげに名のっている。そして、寧波、それから杭州、先ほどの西湖のあるところでありまして、そういうところ、それから蘇州とか鎮江、これ金山寺のあるところ、そういうところをずっと船で行きまして、最後は車、車馬、車や馬で北京へ行ったと。

北京では、先ほどありましたように、大きな東京国立博物館の四季山水図をかいたりしております。それから、記録では、いわゆる宮廷の大きな建物を、宮殿の壁画として墨の

絵で龍をかいたという記録なども残っております。ちょっと時間が過ぎておりますが、その晩年に、雪舟はその中国などを振り返りまして、中国には優秀な絵かきがおらなんだと、絵はあったけれども師とするものはなかったというふうなことを、これ76歳で申しております。

しかし、実際は、先ほど見ていただきましたように、まさに中国的な絵といえますか、日本にいるときから恐らく親しく勉強してた馬遠とか、夏珪とか、梁楷とか、牧谿とか、そういったすぐれた画家につきましては、もう生涯尊敬して、その作品の模写、ないしは筆法を受け継ごうと努力してたと思いますし、またそういう中国に行きまして、実際の風景、風物を写すことによって、言ってみれば日本にいたとき、周文の絵に見たように現実感がないと言いますか、もう虚構でつくられている、あるいは生命感といえますか、人間が生きている、そういう生き生きとした姿というものが無いものを、言ってみればぶち壊すと、その大きな転機になったのが中国旅行だったんだらうというふうに思っております。

その後、高橋さんに。

東京国立文化財研究所主任研究官・島尾 新

では、続けてお願いします。

正木美術館学芸員・高橋範子

高橋です。島尾先生が、先ほどの話の中で、私に回して下さったことが多過ぎるものですから、時間があるかどうか、ちょっと難しいんですけども。私は、今守安さんがおっしゃった中国から帰ってから、それから次は山口の福島さんですので、山口で生まれた中国の名品、雪舟の名品「山水長巻」というものが生まれるまでの時期というのを担当します。

文明の元年に、雪舟50歳で中国の方から帰ってきまして、それで「山水長巻」が生まれるというのが、ちょうどその文明の18年、67歳のときなんですね。この十七、八年の間に、雪舟の中に何が起こったか。つまり、50歳から67歳の老人の男性の画家の中に、どういうふうな生涯の記録があったかというようなことをお話しできたらいい、そう思っています。

京都の方から、なぜ山口に来なければいけなかったのかというようなところは、なぜが多いというふうに言われていますが、やっぱり守安先生がおっしゃったみたいに、京都の五山の禅宗の社会の中で出世できないというような一つのあきらめというものが、やはりあったんだらうと思います。その雪舟が、山口の土地に来て、そしてその守護大名である大内氏が船を出す、その中国に、その船に乗って渡ってみたいと思うような、それは雪舟自身の願いだっただのか、あるいは周りの人脈がそういうふうに通じたのか、とにかくこの雪舟が中国に行ったというのは、彼の画家としての人生の中で、これが彼を今まで私たちに大雪舟というふうに思わしめた一つの彼の成功だったということが言えると思いますが、ですからそれから帰ってきた雪舟というのは、中国帰りの画家、しかも今まで日本の水墨画というのは、鎌倉時代に禅宗という宗教と一緒に入ってきましたけれども、それが

ら雪舟までの間の長い時期、日本の水墨画家というのは、まだ見たこともないその中国の絵を、中国から入ってきた中国絵画の中の風景をまねをするというような形で行っていましたけれども、実際にその中国の風景を見た初めての画家として、彼は名声を得ていくわけです。

この十七、八年間の間は、一つにはそういった中国帰りの画家雪舟というような名前のもとで、日本のいろんな風景、土地を旅をするというような記録が残っておりまして、そういった時期であるというふうに考えていただいてもいいと思います。

この時期の間に、そういった意味で、漂泊の画家雪舟というようなイメージというのが、全くこの時期につくられておりますし、それからまた「山水長巻」というような名作が生まれる間に、やはりこの中国の体験と、それに加わるところの日本の風景の体験というようなものが、やはりほかの画家にはなかった雪舟の絵筆への影響というようなもので考えていけるんじゃないかというふうに思っています。

同時代の記録、この当時の記録の中で、雪舟の中国行きというのは南遊、南に遊んだというような2文字で残されるんですけども、日本の旅、山口から東の方に国内を旅をするという意味で東遊、東に遊ぶというような2文字で、雪舟のこの時期の行動というのは記録に残されています。もうそのときに、きょうのサミットのこのご本の中で「雪舟ゆかりの地紹介」でありますように、福岡県の川崎町の方には、大分に雪舟がつくったアトリエと言われていたところの天開図画楼とかというようなものがつくられた、つまり雪舟が大分の方に足を伸ばしたということもわかりますし、大野町の「鎮田滝の図」というものは、実際に雪舟がその土地を訪れたということの証明にもなるでしょうし、また帰ってから10年ほどしてからの制作が確かめられる「益田兼堯の像」というようなものは、実際に雪舟が益田の地を訪れたというようなことの証明にもなってくるというふうに思っております。

でも、そういった時期を経て、それでも確かなその東遊という日本の国内での記録というものを残すものとしましては万里集九という、当時相国寺の、かなり、彼は出世をあきらめたのではなくて、かなり住職まで上り詰めれるだろうというような人物だったんですけども、とあるとき、応仁の乱を境になんですけども、還俗をしてしまう。お坊さんをやめてしまって、美濃の国、岐阜とか、今の名古屋とかというようなあたりを指すと思うんですが、そのあたりに還俗して移り住んでしまった人の詩文集「梅花無人蔵」という、かなり分厚い詩文集が残っておりまして、その中に雪舟が文明13年秋に、その万里集九のかかわるところの美濃の正法寺というところにやってきたんだというように、しっかりと書き残されています。

今まで大分のことも益田のことも、絵だとか、あるいは絵でもってそこに行っただろうということなんですけれども、このたびこの美濃の訪問というのに関しましては、全くその記録にしっかりと書き残されている時と場というのが確認されるものでして、これが東遊というような漂泊の画家、うろろうしたんだというような中でも、唯一文献の上で確か

められる時と場ということになっております。これは、時期を確かめてみますと、中国から帰国して12年後ということで、雪舟はもう六十二、三歳というようなところになっているわけです。

こういったところで、あと加えていくようなその場所と、それからそこから生まれた作品というものがいないかというようなことでいきますと、具体的にはその「山寺図」といういろんな問題のあるものも、いろんな場所の特定というのは難しいと思うんですけども、それからいろんな先生の説というものが出ましたけれども、今のところ私の世代の美術史家が確認できる文献からいきますと、やはりこの「山寺」というのが、万里集九、そういった貴重な唯一の記録を残したところの万里集九の、この美濃にまつわるものというふうに見ていた方がいいんじゃないかというふうには思っております。

それから、こういった東遊というふうに大きく一つの熟語として記録の中に明らかに残されるこの雪舟の日本の旅なんですけれども、こういったものが、恐らくは足かけ二、三年というようなことで考えていきますと、それから雪舟の人脈、それから美濃から次に送り出される時の状況みたいなものをその詩文集の中に読んでいきますと、やはり「天橋立」というようなものは、82歳の方にまで持っていく必要もないんじゃないかというのが私の意見です。恐らくこの東遊の流れの中で、私のした作業というのは「天橋立」に美濃から導くような、そんな人脈というのを万里集九の「梅花無尽蔵」の中に探り当てるという作業でしたけれども、そういったことで、82歳というような多宝塔の建立の時期にとられることなく、一度東遊の時期の六十二、三歳のころというような時期に置いてみて、またこれは後の作業としても続けていかなければいけないことですが、そういった意味で、これを東遊の時期のこの六十二、三歳のころに置いたときに、今度は雪舟が全体の流れがどういうふうに眺められることができるだろうかというようなところで、新しい説でも何でもありませんが、こういう過程を一つ置くことによって次へのステップを得たいと思うのが、私のこの「天橋立図」を通しての最近の仕事でした。

この時期、漂泊の画家のイメージというのが雪舟にできた時期というようなことで、こういった日本の風景、中国の風景の体験によって「山水長巻」という長大な雄大な一つの名作が生まれていくというような時期として、この時期を説明しておきたいと思います。

これから後は、福島さんをお願いします。(拍手)

山口県立美術館研究員・福島恒徳

それでは、その後、山口を拠点にして活動していた時期のことについて、少しお話をします。

この時期は、ほかの時期と違まして、移動がないんですね。雪舟がどこかにいったというような記録がない時期です。そこから、ネガティブな資料の扱い方ではありますが、恐らく山口に定住をしていたんだろうというふうに想定できるわけです。このころ、これは雪舟が山口に下ってきたころもうそうなんです、大内文化という一般に言われる、山口を拠点にして博多とか、あるいは広島方面まで非常に広い勢力を持っていた大内氏とい

う守護大名の、その人たちの文化が1つあったわけです。恐らく、雪舟もその大内文化を推進していた大内家の人たち、具体的には大内教弘、政弘、義興という3人の時代になりますが、その時代に恐らくは大内氏の保護を受けたどこかの山口の寺院に属して仕事をしていたと考えられます。一般には、雲谷庵と言われます。

あるいは、資料ではこの文明18年、67歳のときに天開図画楼記というものを、了庵桂悟という雪舟の旧知の京都のお坊さんが書いていますが、その天開図画楼、そういう名前の場所にどうやら雪舟はいたらしいですね。大内家と雪舟とのかかわりというのは、実はほとんど資料がなくて、具体的にどれくらいの社会的性格を持っていたのか、それは確認できませんが、大内のお寺、例えば香積寺とか、臨済宗系の大きなお寺が幾つかありましたので、恐らくそういうところに属していた。そして、保護を受けながら、禅のお坊さんですからお寺にかかわる仕事ですね。例えば、頂相と言われるお坊さんの肖像画をかいたり、あるいはお寺をたくさん大内氏が建ててます。そういう場合には、そののふすま絵をかいたり、あるいは本尊になるような仏画をかいたり、そういう仕事の傍ら、一方では「山水長巻」のような鑑賞する目的の山水画、そういうものもかいていたと考えられます。

それで、今ちょっと出ました天開図画楼のことなんですけれども、今山口へおいでいただきますと、雲谷庵跡ということで小さいおりが建ててあります。あれは明治時代に、ここがそうだろうということで推定をいたしまして、今そこにいおりを建てて、雪舟の住居跡を偲ぶ形になってるんですけれども、もともとどこにあったかは、実のところははっきりしておりません。山口にあったことは確かですけれども、はっきりしておりません。そして、先ほど来申しておりますように、どこかの寺院の一角であろうと思いますが、その寺院もはっきりわかっておりません。つまり、実は大して雪舟のことは、この時期のことはわかってないというわけですね。ただわかっておりますのは、この時期ですと、文明18年「山水長巻」を描いてます。これは文明18年にかいたと、自分で署名をしておりますのではっきりしております。

それからまた、同じ年ですけれども、「蔗庵図」という絵を、これを関西にいたお坊さんに頼まれて絵をかいています。

それから、今度は、71歳のとき、先ほど島尾さんの講演の中にも出てきましたが「自画像」ですね、1490年、71歳のときに「自画像」をかいて、それを一番弟子と言われている秋月等観という人にあげています。

それから5年後、1495年、76歳のときですが、このとき、やはり有名な国宝の東京国立博物館にあります「破墨山水図」と通称されている作品ですね、これを弟子の宗淵という人に修行が終わったあかしということであげている。

それからもう一つ、今度はその翌年ですね、77歳のときに「慧可断臂図」という達磨と、それからその弟子の慧可を描いた、雪舟の作品としても最も大幅、一番大きな作品の一つですけども、その作品を残しています。

その後は、わからないんですね。亡くなった年もわかりませんし、一応1506年、永正3年のことと一般に言われていますけども、わかりません。場所も、島尾さんがおっしゃったとおり、決めてを欠いております。あとは、よく言われる宗淵に書状を送ったということで書状が残ってまして、それを81才のとき、1500年ちょうどに書状を送ったと言われておりますが、この書状に関してはかなり問題がありまして、まだ十分に自信を持って使える資料ではないというのが現状だと思います。

没記のことについては、また後ほど多少話が出るかと思いますが、1つだけはっきりしていることがあります。大原家ご所蔵の国宝の「山水図」、牧松周省と了庵桂悟賛の「山水図」がありますが、これの了庵桂悟の賛が1507年、永正4年の賛です。そこには雪舟が亡くなったというふうに書いてありますので、この年にはもう既に亡くなっているということだけはわかっていることですね。山口に定住をしたと考えられる文明18年ころ以降のお話は、かいつまんで申し上げますと、今のような話になります。

その間に、1つだけ足しておきたいことは、何年に何をしたということはないんですが、先ほど来、秋月、あるいは宗淵という弟子に作品を与えたり自画像を与えたりしております。実は、雪舟にはほかにたくさん弟子がおりまして、記録になかなか残らないんですが、ざっと数えただけでも30人は下らないというぐらいたくさん弟子を教えています。今の秋月等がありますね。それから、雲谷軒を継いだといわれる周徳、あるいは等春とか、たくさん名前が出てきます。ある程度、一つの流派的な、今残っている作品を見ましても一つの流れとして、私どもはそれを雪舟流と読んでますけども、流派的なやわらかい形ではありません。きちんとした組織、後の江戸時代の流派とは違うと思います。けども、やわらかい形のある画家の一团というものが想定できるんだろうと思います。その人たちによって、雪舟の画風というものがあちこち全国に伝えられている。山口におきましては、最も強く残りまして、雲谷派という流派が、後に江戸時代には幕末まで続いていくことになります。

そういったことです。

東京国立文化財研究主任研究官・島尾 新

どうもありがとうございました。

というように、雪舟の人生というのはいろいろと問題が多過ぎまして、これいろいろ全部やっていると1日あっても全く足りないというのを、残り30分でどうしようかと思うんですが、今回の雪舟サミット、一応こちらの芳井町で行われているということもありますので、このそばに、これ広島県ですけども、こちらへ上がっていただいている佛通寺さん、佛通寺というお寺がございます。これは非常に有名な大寺であったわけですけども、これはまた雪舟とかなりゆかりのあるお寺でございます、とりあえずそのあたりのことから話を始めようと思うのですが、ちょっと佛通寺さん、ちょっとお願いできますか。

三原市『佛通寺』管長・對本宗訓

佛通寺から、きょうはこういった貴重な場へお招きをいただきまして、まことに光栄に

思っております。

先ほど来、フィルムの上映を拝見いたしましたり、あるいは専門の諸先生方の、主にこれは美術史の観点からでありますけれども、講義とか、それからいろんなご意見を伺って、私も今皆さんともども勉強をさせていただいておるところでございます。

私はむしろただの禅僧でございますので、佛通寺という一介寺の住職でございます、殊さら雪舟というものを研究いたしましたことございませんし、こういう場の上ってパネリストとして参加するほどのものは、実は持っておらないわけであります。しかしながら、今回ご承知のように、こちら芳井町にあります佛通寺の末寺である重玄寺というお寺、これが非常に雪舟とゆかりがあって、雪舟のまさに終焉の地であるということ、皆さん方、言っていっしょるわけですね。そういう御縁で、佛通寺の代表としてここへお招きいただいたんだらうというふうに私は解釈をいたしておるわけであります。

先ほども、最初にこちらへ参りまして、控えの方で少しお話もさせていただいたんですけども、さあ、いざ「雪舟」と申しましても、私どもに浮かんできますのは、あんまり絵のことしか、それも非常に、言ってみれば日本史の教科書的なものしか浮かんでこない。途中から申しわけないなど、こう思っておるわけなんです。禅僧にとりましては、やはり「慧可団臂問図」という、これは達磨大師が、後に二祖となって跡を継がれる慧可、それ慧可大師が達磨に入門をされるときのところの場面ですね。ですから、これは典型的な道釈画でしょうけれども、それを一番最初に思い浮かべますし、先ほどフィルムで上映されましたすばらしい山水画、これは私もいろんな博物館で、美術館で実際に何点かは過去に見ておるわけでもありますけれども、いわゆる画僧というより画家としての雪舟しか思い浮かばないんですね。もちろん雪舟は坊さんですから、先ほど少し説明がございましたように、井山の宝福寺とか、あるいは相国寺、東福寺といったような禅僧としての修行の経歴というものは、もちろんあるわけなんです。だけど、彼のいろんな残っております伝記を読んでも、そう大してその部分は出てこない。1つには、余りにも彼の画家としての、画人としての画が、功績が大きいからでして、それが1つ私はあるんじゃないだろうかと思うんです。

それから、私たち今の禅僧にとりまして、画僧という言葉を使うのは適当かどうかわかりませんが、画僧「雪舟」というものを語る場合に、一番困るのは、当時の五山の、いわゆる五山文学、五山芸術のああいう雰囲気というものは、私たちにとっては余り理解できないわけですね、これはよほど研究すれば別なんですけども。恐らく、その当時の坊さん社会のことは、我々禅僧よりも、ここにいらっしゃる先生の方がよく御存じだと、恐らく思うんです。私たちと今の禅僧の社会というものは、やはり江戸中期以降の極めて、「実践偏重」という言葉をあえて使いますが、そういう禅の気風があるわけですね。そういう等からいたしますと、絵をかくなんていうのはとんでもないと、そんなものは禅僧でも何でもないということになってしまうわけです。文字を奔するようなものは、それ

はもう禅僧じゃない、第二、第三に下った余技の世界にすぎないということになってしまうわけなんです。

と言いながら、白隠和尚なんていうのは、非常にすばらしい禅画を残しておられますので、ある程度の道に到達した人は、いろんな表現方法として絵もかければ歌もつくれるし、そういう広がりというものが出てきたんでしょうけれども、少なくとも修行僧の実践ということから見ますと、絵をつくったり庭をつくったりというのは、もっと後のことということになってしまうわけであります。

今、私は佛通寺へ参りまして、まだ2年半でございまして、佛通寺の歴史に関しましても余り勉強はいたしておりませんので、どれほど確実なことをここで申し上げられるかわかりませんが、佛通寺にはご承知のとおり雪舟の足跡があるということは言われておるわけであります。ちょうど、こちらの重玄寺の開山である千叡和尚ですね。あれを（みょう）と読むのかどうか、私はそれからして最初びっくりしたんですけど、一応千叡（せんみょう）と呼んでおられるようですけども、千叡和尚がこの方は愚中和尚、開山愚中和尚の高弟の一人でありまして、後に佛通寺へおいでになった方はおわかりなんですけども、佛通寺には含暉院という開山堂があります。これは石段をずっと上まで登っていただいたところにある、恐らく佛通寺創建当初そのままであろうということで、特に地藏堂と我々言っております仏殿は重要文化財に、これは建物ごと指定されております。恐らくそのものが残っておるんでしょうけれども、その開山堂の含暉院の、ちょうど西裏手に当たりますか、今はもちろんこれやぶの中ですけども、ここに長松院という塔頭がかつてあったんです。「長い松の院」と書きます。この長松院というのが、千叡和尚が一番最初に開かれたお寺、五院と言って5つの重要な塔頭があるんです。その中の一つでありまして、千叡和尚が長松院におられたときに、さらに長松院の前あたりに、先ほどフィルムにも出ておりましたけども、篩月庵といういおりを結んで、雪舟の滞在のためにいおりを建てたんだというふうな言い伝えは、私がかねがね聞いております。実際、篩月庵といういおりは、その後もずっと長く続いておりまして、歴代の住持が入っておりますから、確かにこれは存在しておるわけであります。

そして、篩月庵というその跡地にたたずみますと、まさにこれは篩月という名にふさわしい、たけかんむりに師匠の師ですね、篩（ふるい）という字だそうです。ちなみに、これは天龍寺の開山の夢窓国師が非常に好まれた言葉だということを、私は天龍寺に修行しておりますときに師匠から聞きまして、扁額も残っております。そういうつながりがあるのかないのか、私わかりませんが、まさに竹やぶの中へ立ちますと、その竹のうっそうとした篁中で、月影がその竹の枝の間から差し込んでくる、まさにこれは篩月の名のとおりだなということを感じるわけです。あるいは、その篩月庵、ちょっとこうがけっ縁へ出てみますと、佛通寺の谷間が一望のもとに眺望ができるんです。だから、やはり篩月庵においでになったら、あそこまで見ていただかないと、私はいけないんじゃないかと思うんですね。

雪舟の山水画の中には、もちろんあれは極めて中国的な情景だろうと思うんですけども、あれほどまでの雄大な岩山と川とか、そういう景色が日本の中にあるのかどうか、私知りませんが、それを日常化したようなものであれば、まさに篩月庵から眺める景色というのはそのものだなというふうなことも私は感じておるわけでありませう。

それから、雪舟庭というのも佛通寺には実は4つか5つあるのでありまして、これも私一番最初参りまして、非常にびっくりしたことがあるんですね。伝雪舟庭でしょう。先ほどのフィルムには、崑崗池という一番正面の橋を渡った県道沿いにある、これは今も満々と池に水がたたえられておりますので、そこに伝雪舟庭という石碑がちゃんと建っております。恐らく雪舟がつくった庭であろうと言われております、あくまでも「伝」ですから。それから、塔頭の中に正法院とか永徳院というお寺がありまして、それぞれにまた雪舟庭があるんですね。どうもまゆつば臭いというのが、私の正直な感想なんです。

果ては、その宝物館の裏にまで雪舟庭と、こう大きな看板を上げて、明らかにこれは客引きじゃないかというふうに思えるようなところまであるんで、説明のおばさんが一生懸命説明して下さるんですけど、やっぱり何となくそうだなという気にはならないんですね。もちろん、例えばその山口の常栄寺とか、いろいろなお寺に残っております立派な整った雪舟庭である必要はないんでありまして、崩れかけてたっていいわけですし、本当に石組みしかかすかに残っていないという雪舟庭でも、私は構わないと思うんですけども。

私は今願うことは、ちょうど佛通寺も今、本当何十年かぶりに土蔵を開きまして、寺宝を一生懸命整理をしておるんです。三原市のその担当の先生にご奉仕いただきまして、檀家さんも出ていただいて、ちょうどきょう檀家さん、そこに来ておられますけど、一生懸命ここを調査していただいておるんですね。今まで雪舟作として伝えられていたものが、実は後で調べてみると、どうもこれは雲谷等顔の作らしいと。実際、「日本の美術」というシリーズの中の「雲谷等顔」という本をごらんになれば、佛通寺の障壁画がずっと載っております。この間も、博物館から先生がお見えになって、恐らく間違いなくこれは等顔であろうというふうなことを言ってらっしゃった。雪舟の名をかぶせることによって、かえって人々は珍重しますので、それで外へ流れずに今まで伝えてこられたのかもしれないですね。実際に、これは雪舟の作だと言われるものが流出したということも、何点か確認されておるわけです。ですから、私たちとしては、できるだけ早くきちっとした調査をして、きちっとしたその管理をして、多くの人にまた見てもいただくようし、研究をして後世に伝えていきたいというふうに考えておるわけです。

その際に、これは雪舟庭のところもそうなんですけれども、どういうスタンスで雪舟を語るかということが、私はやっぱりどうも問題になってくるんだらうと思うんです。雪舟に限らず、佛通寺にはたくさん貴重なだれそれ作、あるいはだれそれ和尚、禅師筆というようなものがあるわけなんですけれども、どこまでがはっきりわかって、どこから先はわからないのかということは、やっぱりきちっと見ておきまさんと、これは別に皆さん方に

言うわけじゃないんですけど、私が、私どもが私ども自身に言って聞かせていることなんですけども。

例えば、雪舟を語るということも、語るの私は自由だと思うんです。雪舟の本物の絵にしても、作者の手を離れた瞬間、もうそれは万人の物ですから、だれがそれをどう評価しようと、どういうふうにそれを読み込もうと、いろんな可能性があると思うんですね。本人がどこまで意図していたかというのは別にして、ひょっとしたらそれとは全く違うように鑑賞できるかもしれないわけですね。それと同じように、彼の人生だって、恐らくそうでしょうし、先ほど京都の出世コースから外れて失望して野に下ったというような解釈もありましたけど、そうかもしれないし、そうでないかもしれない。雪舟が生きてたら、「片腹痛」と言うかもしれない、それはわからないんですね。

しかし、研究者というのは、いろんな論拠に基づいて、これは推測していくわけであります。そして、伝記や歴史の空白を埋めていくという作業を、延々と続けていかなければいけないわけなんです。しかし、やはり雪舟の作品ももちろんですけども、特にここでは雪舟の人生を語るわけですから、雪舟の全人生を一つのテキストとして見るならば、それを語るより前に、やはりそれをきちっと読んでいかないといけないと、私は思うわけですね。

もう一つ言えば、読み込まなければいけないと、私は思うんです。これは、先ほど申しましたように、佛通寺のいろんな古文書に対してもそうであります。ですから、夢とかロマンというの、私は必要だと思いますし、夢とかロマンで佛通寺へ行けば、4つも5つも6つも7つも、その雪舟庭があって、それぞれに客寄せをしているということも出てきてしまいます。一般の人には申しわけないんですけども、今雪舟庭ということで私どもは全然お見せしていないんです。伝雪舟庭ということで、先ほど出た崑崗池ぐらいは皆さんの目につくところにありますのでご案内しますけれども、あとはまだわかりませんし、これからまたいろんな先生方に研究をしていただいて、わかった分だけ皆さんに公表していくというふうにしていけばいいと思うんです。そうすることは、何も雪舟というもののロマンを半減するようなことには私はならないだろうと思うわけです。私も雪舟というものを、これを機会に皆さんと一緒に勉強して親しんでいきたいというふうに思っております。

簡単でございますけど。(拍手)

東京国立文化財研究所主任研究官・島尾 新

どうもありがとうございました。

本来、何か歴史家の方から言わなければいけないことを、すべて言っていたような気がいたします。実際、何しろ500年も前の話ですから、限られた資料から雪舟のすべてを復元するということが、これはなかなか難しい、実際にはだれも会ったことはないわけですし、そのわからないところへどうにか近づこうというのが私たちのやってることなんですけれども、それでもいろいろと段階がありまして、割とはっきりわかるような人

というよりは、先ほどから申し上げているように、雪舟というのはなかなかわからない。わからないときにどうするかと言いますと、結論を急いじゃいけないんですね。ですから、決めちゃおうと思うと、どうしても無理がいく。ただ、そこへ近づくためにいろんなものの可能性をいろいろ積み重ねていく。ですから、逆に、亡くなった土地を含めて、たくさんさんの議論があっただけいい。それぞれがふえていくというか、もっと多様になって、その後でまたいろいろ考えましようというのが今の段階だと、私は思っております。

そうやっていきますと、きょうこれ、先ほど佛通寺さんのお話にも出ました千畝周竹という人ですけれども、こちらの重玄寺の開山。あとは、ちょっと大島さんのところへ行っただけ絵を拝見してましたら、1つ、実物ではありませんが赤外線写真、非常に傷みが強いんですが、パネルが出てきまして、これらも何か関係がありそうだと思いますか、福島さん、1分でこれを説明してください。

山口県立美術館研究員・福島恒徳

先ほどもちらと話ししましたが、雪舟は頂相なんかもかいているんですね。今、山口市にあります瑠璃光寺というところに全岩東純という人の頂相、これは伝雪舟の作品ですが、ここはだんだん評価が上がってきて、雪舟作品、だんだん昇格しつつある作品なんですけれども、その作品と非常によく似ています。作風が、その雪舟の作品に近いということですね。ですから、単なる伝説だけではなくて、雪舟と重玄寺さんというのはもっと深いつながりがあった可能性があるなど、そういうふうに思いました。

東京国立文化財研究所主任研究官・島尾 新

これ1つ出てきたから、じゃあ来たのかとか、これは雪舟なのかと言っても、雪舟はまた絵の方の鑑識の問題がありまして、そのボーダーラインにある絵がいっぱいあって、この辺でこれは雪舟ですかって、研究者の間で多数決をとりますと半々になったり、しかもそれをこっちに手を挙げた人がこっちに挙げるかというのは、またそうでもないもんですからばらばらになってしまうというのが実は現状でありまして、ただこの跡は、確かにその雪舟風ではあるんですね。そうしますと、何かそのつながりがあったらうと。ですから、先ほど私、講演の最後に申し上げましたけれども、こうやって地元の方しか、これの存在も知らなかったわけで、こんな古い絵があるというのは。そうやってますと、出てくるんですね。それで、そのあたりのことで、これまた最初の話に戻っちゃうんですが、いろいろとご協力いただくと、まだまだ土地と雪舟とのつながりというようなものを考えさせるような資料が出てくる可能性が非常にあります。

そのあたりのところで、大島さん、こっちの方に、芳井町の方では、これもずっと資料館にあったものですか、これは。

芳井町立歴史民俗資料館学芸員・大島千鶴

昭和58年の資料館の開館より、資料館の方でお預かりしております。

東京国立文化財研究所主任研究官・島尾 新

そういうことで、こちらの方でも雪舟を語る会というのをなさっているそうですけれど

も、またいろいろそういうことが出てくる可能性がありますので、そのあたりをちょっと大島さんの方から、こちらでの取り組みというのをご説明いただきたいと思います。

芳井町立歴史民俗資料館学芸員・大島千鶴

ご紹介いただきました大島でございます。

時間も押しておりますので、手短にお話をさしていただきたいと思いますけれども、私の方からは、芳井町が雪舟をどのように受けとめ、そしてどのような活動をしているかというようなお話をさせていただきたいと思います。

芳井町では、第3回目の山口市でのサミットへの参加をきっかけといたしまして、雪舟に取り組んだ行事が大変ふえてまいりました。こういう活動派、まだ数年と、日が浅いものですから、ある意味では芳井町での雪舟に関する関心とか学習意欲というものは、大変高いと言ってもいいと思われれます。生涯学習における社会教育の場面ではもちろんですが、例えば商工会が町興しに、あるいは青年協議会が各種のイベントに、また愛育委員会とか栄養改善協議会というようなご婦人方が健康づくりに、また小学校では学習にと、さまざまな場面で雪舟が活動に取り入れられております。そういう行事が企画されるに当たりまして、私は学芸員という立場から、いろいろアドバイスを求められるわけなんですけれども、その際に注意している点が2つだけございます。

まずは、1つには、雪舟を知ろうとするとき、雪舟自身のことを学ぶのはもちろん重要なことなんですけれども、あわせて雪舟の生きた時代というものをしっかりつかんでほしいということなんです。先ほどから何度もお話にも出てますけれども、非常に雪舟についてわからないクwestionマークばかりがついてしまうというようなことがあるんですけれども、そういうこともありまして、外からちょっと雪舟を攻めてみようというようなとらえ方ですね。

雪舟の生きた時代というのは、もちろん室町時代なんですけれども、室町時代といえますと、一般的には戦ですとか、飢饉ですとか、一揆、あるいは下克上と言います非常に暗いイメージが強いわけなんですけれども、反面、例えば今日の日本文化、あるいは日本の生活様式と言われているものの基礎ができた時代ですし、そしてそういう文化が非常に発達した時代でもあります。先ほどの福島先生のお話にもちょっと出てまいりましたけれども、地方の文化も発達しております。あの内田氏によります内田文化というものは、大変すばらしいものがあると私も思っております。

そういう社会の中で、雪舟の果たした役割というのは、非常に重要なものがあつたわけなんですけれども、また一方、この時代といえますのは、非常に高度の経済成長を遂げた時代でもあります。産業ですとか、技術ですとか、商業、そういうものが非常に発達しております。それから、流通網というのも大変発達しております。注目されますのは、そういうような時代をつくり上げたのが、実は将軍ですとか、大名ですとか、一部の人間たちではなくて、名もない庶民たちであったということ。その庶民たちによって、この時代が動かされていった非常にエネルギッシュな時代だったというふうに、私たちはとらえている

んですけれども、この時代の後にも先にも、庶民が主役になり得た時代というのではないわけなんです。雪舟は、むしろこっち側サイドの人に当たっていたんじゃないかなというふうに考えているわけなんですけれども。こういう時代背景をしっかりとらえた上で、雪舟がその時代にどのように位置づけられ、あるいはどのような人であったのか、そしてその作品をどう見るのかというようなことは、非常に重要なことだと思うわけなんです。

また同時に、その当時の芳井町がどのような状況下であったのか。例えば、雪舟の生きた時代の芳井町といいますのは、井原の庄と呼ばれておりまして、これは雪舟が修行しました相国寺の所領でした。そういうことなど、そこに雪舟がどのようにかかわってくるのか、そういう点に注目して雪舟を学んでいただきたい、このようにお願いしています。

それから次に、第2点なんですけれども、講義ですとか、文字の上だけで雪舟を知ろうとするのではなくて、個々人が雪舟を通していろんな体験をしてほしいということなんです。先ほど高橋先生のお話の中にも「体験」という言葉が出てまいりましたけれども、雪舟が評価されている理由というのはたくさんあるわけなんですけれども、その中の一つに、やはりそれまでお寺の一室の中で想像上の風景としてかかれていた水墨画というものを、雪舟がお寺を出まして中国に行って、そして実際の風景というものに触れて、また日本に帰ってきてからも自分の足で旅をして、実際の風景というものをとらえて、それを自分でしっかり受けとめ、紙の上に表現するということをしています。

管長様がおられるので、ちょっと失礼なんですけれども、禅宗という宗教はお経の中に書かれた文字の中に真理があるのではなくて、あくまで自己の体験による悟りというものが非常に大切だというふうに言われています。雪舟の作品の中にも、そうしたものがあらわれているんじゃないかなというふうに私たちはとらえています。そういう雪舟に倣いまして、私たちも雪舟、あるいは雪舟を通した時代というものを体験してみたいということで、いろんな企画を行っております。

1つだけ、具体例をご紹介させていただきます。平成5年と、それから6年と、芳井町青年協議会は「ウォーキングウィズ雪舟」という企画を行いました。ご存じのように、雪舟は大変高齢に及んでも旅をしておりますし、それから当時としては長命であったということなんですけれども、健康の秘訣は歩くことにあったんじゃないかということで、私たちも原点に戻って雪舟の歩いた道を歩いてみようということで、このような企画が行われました。このウォークは、芳井町から、ゆかりの地であります総社市まで、あるいはお隣の佛通寺があります三原市まで歩くという企画だったんですけれども、総社市までが約40キロ、それから佛通寺までが62.4キロ、芳井町の20代の若者たちが歩き通してくれました。時間にしますと、1日、あるいは1日半の行程でしかないんですけれども、やはり車社会になれた若者たちにとっては非常にきついコースだったようで、もう皆さん、足を痛めてしまいまして、1週間ぐらい後遺症に悩まされていたということなんですけれども、ちょっと戦前のお生まれの方とかが聞いたらみけんにしわの寄りそうなお話なんですけれども、非常に足が痛かったということだそうです。

ですけど、それと同時に、彼らの漏らしました感想は、雪舟の時代というのは、今と違って交通事情も悪いし、道も悪いし、非常に危険も多かったわけだから、昔の旅というのは本当に大変だったんだなあと思います。それに、年をとって、あれだけの道を歩くというのは、もう本当に健脚でなければできません。ただ歩くというのではなく、あれはやっぱり修行の一つですねと、このような話が聞かれました。雪舟の絵のよさというものがよくわからないというふうに話していた20代の若者たちなんですけれども、このウオークをきっかけとしまして、彼らの中で雪舟に対する何かが変わったことだけは確かかなようにした。

このほかにも、いろいろ体験をしていただくということで座談会、あるいはお茶会、それから禅宗とともに発達しました精進料理をいただく会、あるいは雪舟ゆかりの里ツアーというようないろんな体験をしていただいております。特に、雪舟の足跡をたどります雪舟ゆかりの里ツアーでは、現在までのところ総社市、山口市、益田市、それから京都といったゆかりの地を訪れまして、関係各位の皆様から大変懇切なご教示をいただいております。

また逆に、それぞれの自治体からも大変大勢の方が芳井町を訪れてくださっております。例えば、大内文化探訪会の皆様、あるいは益田の雪舟顕彰会の皆様、雪舟を通してでなければ得られない非常に貴重な体験、あるいは交流が行われていると思っております。

以上、私たちの活動内容のほんの一部なんですけれども、一口に雪舟を通してというだけで、こんなにもたくさんの貴重な体験をすることができますし、そしてまだまだ奥が深いと考えている次第です。

以上です。(拍手)

東京国立文化財研究所主任研究官・島尾 新

どうもありがとうございました。

何か、ほとんど討論しないうちに時間になってしまったのですけれども、実は先ほど雪舟のことでわからないと申しましたけれども、87歳説というのをとると2006年、それから83歳説だと2002年、これ何かと言いますと、雪舟の500年遠忌という亡くなってから500年というときになります。実は50年前、450年遠忌というときに、これ昭和31年なんですけれども、雪舟ブームというものが起きまして、出版、あるいは展覧会、その他非常に日本じゅうが盛り上がったときがあったんです。これは少なくとも、雪舟の500年遠忌、これまでに450年遠忌までの研究等々につけ加わる何かというのを、50年何もしなかったということでは恥ずかしいですから、つけ加えようと思っております。恐らく、その500年遠忌というときに、日本じゅうとまで言えるかどうかわかりませんが、かなりの雪舟ブームが来るはずですよ。

今、お話が、こちらの主催地の方へ偏ってしまったんですけれども、ここへ参加されておられる総社、益田、山口、大野町、川崎町、それぞれのところで雪舟に対していろんな取り組みをなさっていると思うんですが、ここで私が約束するわけにもいかないんですが、

確実に10年ほど後に、また雪舟で盛り上がる時が来と、それまでぜひその取り組みを
発展させていただいて、何と申しましょうか、みんなで雪舟翁と仲よくやりましょうとい
うことを最後に申し上げておきたいと思います。

ともかく、もう時間になりましたので、これで最後にいたしますけれども、どうもあり
がとうございました。ちょっと長い時間になりましたが、これでフォーラムを終わらせて
いただきます。今後とも、ぜひその500年遠忌へ向けて、この雪舟サミットが毎年発展
されることをお祈りして、終わりの言葉にさせていただきたいと思います。(拍手)

司会

島尾先生、守安先生、高橋先生、福島先生、對本管長、大島学芸員によります「雪舟フ
ォーラム」でした。

限られた時間でのトークセッション、まだまだお聞きしたいという気持ちは皆さんご一
緒だと思いますが、残念ながら、お時間となってしまいました。

貴重なお話をしてくださいました先生方に、いま一度盛大な拍手をお願いいたします。
(拍手)

続きまして、次は地元芳井町の子供たちによります「備仲神楽」をごらんいただきます。
準備のため、しばらくお待ちください。

(中断)

それでは、アトラクションに移らせていただきます。

芳井町ふるさと子供神楽の皆さんによります備中神楽を披露いたします。

この備中神楽は、岡山県西部地方に古くから伝承されております国の重要無形民俗文化
財でございます。

本日は、その中から「おろち退治」の一幕をごらんいただきます。

(芳井町ふるさと子供神楽アトラクション)

司会

芳井町ふるさと子供神楽の皆さんでした。

以上をもちまして、第6回雪舟サミット、第1日目の公式日程を終了させていただきます。
皆様、まことにありがとうございました。(拍手)